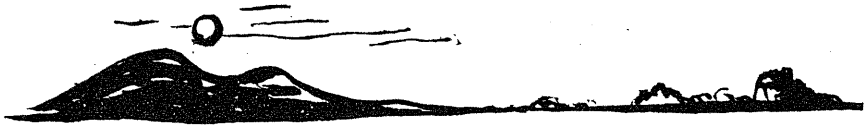


月夜の太鼓（幼児童話）

內山憲堂

一

先生がこの間新聞を見てゐますと、お婆さんが大きな袋を持つて立つてゐるお寫眞が出てゐました、その横にたぬきさんがチョコンと坐つてゐます。このお寫眞は、お婆さんが堤を歩いてゐるとたぬきさんが怪我をしたのをたすけて、つれて歸つてあげたのですつて、面白いでせう。たぬきでも可愛がつてやればとてもよく人になつくものですよ。今日は、狸さんと花子さんと太郎さんのお話をしませうね。

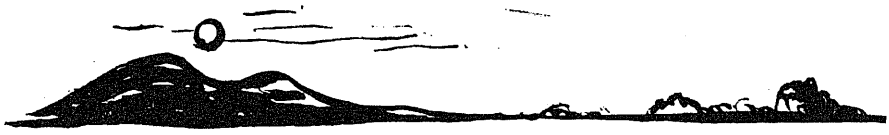
二

あるところに太郎さんと花子さんと二人の兄妹がゐました、太郎さんが兄さんで、花子さんが妹さんなんです、二人はとても仲がよくてどこへ行くのにもいつも一緒でした。

ある日のこと二人でお山へお花をとりに參りました。

「花子、お山の上は隨分澤山お花があるね。兄さんは青い花をとるよ、花ちやんは女だから赤いお花をおとり」

「えゝ、じや私赤い花をとりますわ」



太郎さんは青い花をさがして取り始めました、花子さんは赤いお花をさり始めました。

「隨分あるね、そら青い花、こゝにも青い花、……あそこにも青い花……」

「赤い花も隨分ありますよ、そら赤い花、こゝにも赤い花、……また一つ……こんなきれいなの……」

太郎さんは青い花をさりながら谷の方へ行つて仕舞ひました。花子さんは赤い花をさりながら、だんだんお山の上の方へ行つて仕舞ひました。

花子さんがヒョイと頭をあげて見ますと、太郎さんがゐないでせう。

「おや、兄さんはどこだらう……兄さん。あれ、兄さんがゐなくなつた、兄さーん、どこへ行つたのでせう……兄さーん、おにいーさーん——」

いくら呼んでも兄さんはお返事をしません、もう、うす暗くなつて、夕方です、花子さんは、こまつて仕舞つて、どんどんかけ出しました。けれども道を間違へたのでせう、お山の一番頂上へ出て仕舞ひました。

「あら、お山の上だわ、道を間違へたのかしら……こまつたわね、どうしませう」

花子さんは、もう、泣き出しさうになりました。すると花子さんの前へコロコロところがつて來たものがあります。よく見ると、小さい子供の狸さんです。

「おや、まあ、可愛いゝ狸の子供だこと」

狸の子供は、花子さんの前へ來てチョコンと坐りました、そして前の足を花子さんの方へツーと出しました。

「まあ、どうしたの、足がいたいの……」

花子さんが足を見ますと、足の先に、とげがさゝつてゐます。

「あ、これが痛いの、とつてあげませうね」

花子さんは、狸の足のとげをぬき取つてやりました。狸はうれしさうに、三べんペコンペコンペコンとお辭儀をしました。

花子さんは、お腹はすいて來るしお家へは歸られないので心配さうな顔をしてゐますと、狸はどこからか、おいしい果物を取つて來て花子さんの前へ持つて參りました、花子さんがそれをたべますと、とてもおいしい果物です。狸は花子さんをなぐさめるつもりでせう、後足で立ち上つて、お腹をポンポコポン、ポンポコポンとたゝきながら踊つて見せてくれます。その内に日はくれて夜になりました、大きなお月樣が森の上へポカリとお顔をお出しになりました。

三

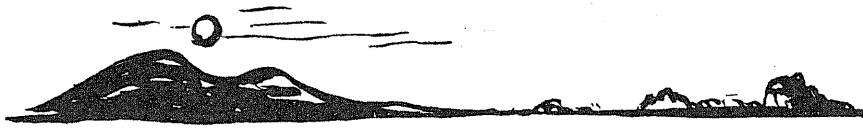
兄さんの太郎さんも、花子さんを見失なつたでせう、『花子はきつとお家へ歸つたのだらう』と思つて家へ歸つて來ました、そしてお母樣に

「花子は歸つて來ましたか」

と尋ねますとお母樣は

「いやまだ歸りませんよ」

と、おつしやいました。太郎さんはとても心配になりました。



「こまつたな、どうしたんだらう、きつとまだお山にゐるにちがひがない。よし僕、迎へに行つて來やう」

太郎さんは、玩具箱の中から太鼓をとり出しました、そして又お山を登り初めました。

「花子さんやーい　トントントン」

だんだんお山の奥の方へ登つて來ました。

「迷子の迷子の花子ちやんやーい、トントントン……花子ちやんやーい　トントントン」

すると、どこかで「ボンボンボン」と音が聞へます。

「おや、おかしいな、花ちやんやーい　トン　トン　トン」

「ボン　ボン　ボン」（小さな聲で）

「おや、面白いな　花ちやんやーい——トコ　トン　トン」

「ボコ　ボン　ボン」（小さい聲で）

「あれ、太鼓の通りだ、よしあの音の方へ行つて見やう、花ちやんがゐるかも知れないよ」

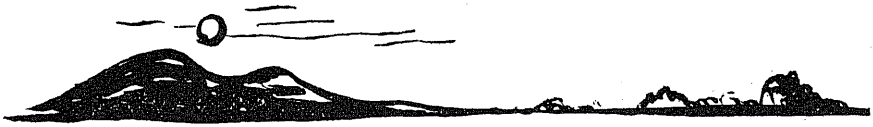
「迷子の迷子の花ちやんやーい　トーン　トーン」

「ボーン　ボーン」（少し大きな聲で）

「面白いな、トコ　トコ　トン」

「ボコ　ボコ　ボン」（次第に大きく）

「トトンのトン」



「ボコンのボン」（少し大きく）
「トトン　トントン　トコ　トン　トン」
「ボコン　ボンボン　ボコ　ボン　ボン」（稍〻大きく）
「トン　トン　トン」
「ボン　ボン　ボン」（大きく）

太郎さんが、お山の上を見ると、小さい狸さんが、腹づゝみを打つてゐます。その後の方に花子さんらしい子供がゐます。

「あれ、花子だな……花ちやん……」

「兄さんーん、こゝですよ」

太郎さんは、いきなりかけ上つて、花子さんのところへ參りました。

「よかつたね」

「兄さんありがたう、よく私がこゝにゐることがわかりましたね」

「僕が、太鼓をトントントンと打つと、ボンボンボンと聞へるから、その音をたよりに登つて來たのだよ」

「この狸さんが腹づゝみを打つてくれたのですよ」

「狸さん、ありがたう、さあ、花子、母さんが心配してゐらつしやるから歸らう」

太郎さんと花子さんとは、大急ぎでお山を下りてお家へ歸りました。

四

二人がお山の方を見ますと、丸いお月樣の下で狸がさもうれしさうに

ポン　ポン　ポン　ポンコポン
ポンポコ　ポンのポン　ポン　ポン
ポン　ポン　ポンポコポンの
ポンポコ　ポンの　ポン　ポンポン　（證誠寺の狸囃子の曲で）

と腹づゝみを打つておどつてゐるのが見えました。

實演上の注意

一、太鼓の音と狸の腹づゝみの音が反復するところがクライマックスであります。リズミカルに同じ調子の反復をして下さい。

二、狸に言葉を云はさずにすみますならこのまゝ話して下さい、極めて小さい子供の時は人間の言葉を云はせ下さつても結構です。

三、十二三分の話です、ゆつくり、技巧をあまり用ひず、自然に、一人一人の子供に話すやうな氣持ちで話して下さい。

四、この話は十二月三日の新聞に出てゐた、前足を鼠捕りにはさまれた狸をお婆さんがたすけて袋に入れて、つれて歸つたと云ふ記事にヒントを得、「迷ひ子のおのが太鼓で尋ねられ」と云ふ川柳の句の想を加へて作つたものであります。

五、童話は子供の生活であります、童話は私たちの生活の中にも發見せれるものであると云ふことを忘れないで下さい。